長崎県芦辺町文化財調査報告書　第２集

大　塚　山　古　墳

—壱岐郡芦辺町深江栄触字清水所在—

1987

長崎県芦辺町教育委員会

長崎県芦辺町文化財調査報告書　第２集

大　塚　山　古　墳

―壱岐郡芦辺町深江栄触字清水所在―

1987

長崎県芦辺町教育委員会

発刊のことば

このたび，昭和61年度に実施しました大塚山古墳発掘調査の結果を報告書として発刊するはこびとなりました。

大塚山古墳は，壱岐島の南東部にある弥生遺跡「原ノ辻」の北方，高麗版大般若経（国指定重要文化財）で有名な安国寺東側の丘上にあり，５世紀後半の築造といわれ，壱岐における最古のものであろうと，関係者の注目を受けていたものであり，早急な正式の調査が望まれておりました。

古文化財といわれる古墳の発掘保存顕彰は，私たちの祖先が残した尊い文化遺産であり，これを立派に保護し子々孫々へと継承していかなければなりません。

その意味におきましても，この調査報告書が壱岐における古墳時代を知る資料となり，又学術研究に御活用くださいますならば幸いに存じます。

最後になりましたが，今回の調査にあたり担当いただきました長崎県教育庁文化課の方々，ならびに多大な御援助，御協力賜わりました大蔵元廣氏をはじめとする地元の皆さまに対し，心から感謝を申し上げ発刊のことばといたします。

昭和62年３月

芦辺町教育長

高　田　　博

例　　言

1．本書は壱岐郡芦辺町深江栄触字清水 504―3番地に所在する大塚山古墳の墳丘実測調査の結果報告書である。

2．調査の事業主体は芦辺町教育委員会，調査担当は県教育委員会が行い，昭和61年度の国庫補助および県費補助を得て実施した。

3．調査期間は昭和61年7月28日～同年8月9日まで実施した。

4．調査関係者

芦辺町教育委員会	高田　博	教育長
	長嶋邦昭	教育次長
	榎本俊寛	学校教育係長
	原田登志子	学校教育係
（調査担当）	田口唯雄	派遣社会教育主事
	川上豊次	社会教育主事補
	浦川　巧	社会教育主事
長崎県教育庁文化課	田川　肇	調査係長
（調査担当）	副島和明	主任文化財保護主事
（　〃　）	伴　耕一朗	文化財調査員
（調査内業）	冨田知江	整理補助員
調査指導	石丸太郎	県文化財審議会委員
調査協力者	大蔵元廣	町教育委員会委員
	横山　順	壱岐郷土館長

5．本書は分担執筆した。

Ⅰ，Ⅱ―1，2，Ⅲ―1―(2)，(3)を副島，Ⅲ―1―(1)を伴が執筆した。（なお，調査時の写真撮影は副島による。）

6．本書掲載のⅡ―3は横山，Ⅲ―2は副島康司（現長崎東校等学校）については，横山の協力を得て「大塚山古墳石室実測調査報告書」壱岐郡文化財調査委員会発行をそのまま掲載させていただいた。（巻末に執筆者を記した。）

また，白華和尚の古文書の写真，瑳の実測図，石室実測図は横山より提供を受けた。

7．本書の編集は副島による。

本　文　目　次

Ⅰ　調査に至る経緯 …… 1

Ⅱ　遺跡の地理的歴史的環境 …… 5
　1．　地理的位置と周辺の遺跡 …… 5
　2．　白華和尚の古文書 …… 8

Ⅲ　調　査 …… 11
　1．　墳丘実測調査 …… 11
　　(1)　墳　丘 …… 11
　　(2)　石　室 …… 12
　　(3)　まとめ …… 12
　2．　石室実測調査 …… 14
　　(1)　石　室 …… 14
　　(2)　出土遺物 …… 18
　　(3)　まとめ …… 20

挿　図　目　次

Fig. 1　位置図
Fig. 2　周辺地形図 …… 1
Fig. 3　芦辺町遺跡地図 …… 3
Fig. 4　墳丘土層断面図 (1/80) …… 10
Fig. 5　墳丘実測図及びトレンチ配置図 …… 11
Fig. 6　B～Dトレンチの石室裏込め状況平面図 …… 13
Fig. 7　石室実測図 …… 15
Fig. 8　出土遺物実測図 …… 18

表　目　次

Tab. 1　遺跡地名表 …… 6

図　版　目　次

PL. 1　白華和尚の古文書……27
PL. 2　大塚山古墳遠景・石室前方の深江田原……28
PL. 3　石室全景……29
PL. 4　石室近景……30
PL. 5　石室構築状況……31
PL. 6　石室裏込め状況……32
PL. 7　A～Dトレンチの調査……33
PL. 8　出土遺物・調査参加者……34

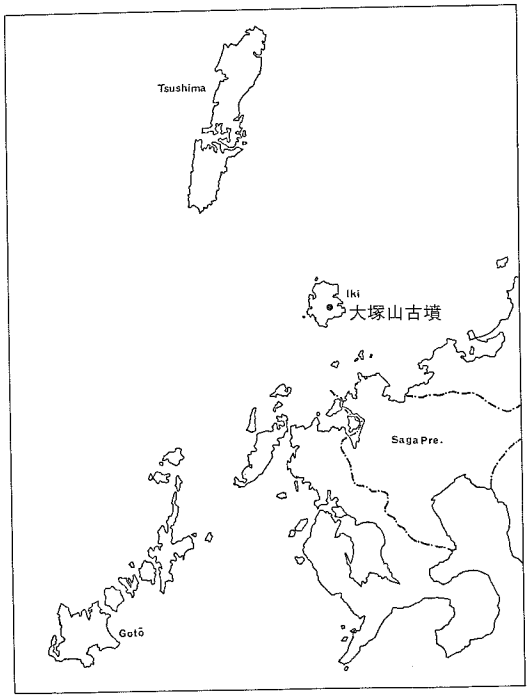


Fig. 1　位置図

Ⅰ　調査に至る経緯

安国寺の裏手後方に寺山と称される小丘陵が連なり，山頂部に大塚山古墳，俵山古墳，俵山新古墳[註1]の存在が確認されている。

安政２年２月27日に壱岐安国寺の観翁白華和尚により，古塚（大塚山古墳）の調査が行なわれ，発見の経緯を記した古文書[註2]と発見された須恵器・瓊が大蔵元廣氏（所有者）によって保存されていた。

昭和57年８月に壱岐郡文化財調査委員会の委嘱を受けた壱岐国研究会は大塚山古墳の石室実測調査[註3]を実施した。この調査は古墳の保護および石室の構築状況を解明するための調査でもあった。

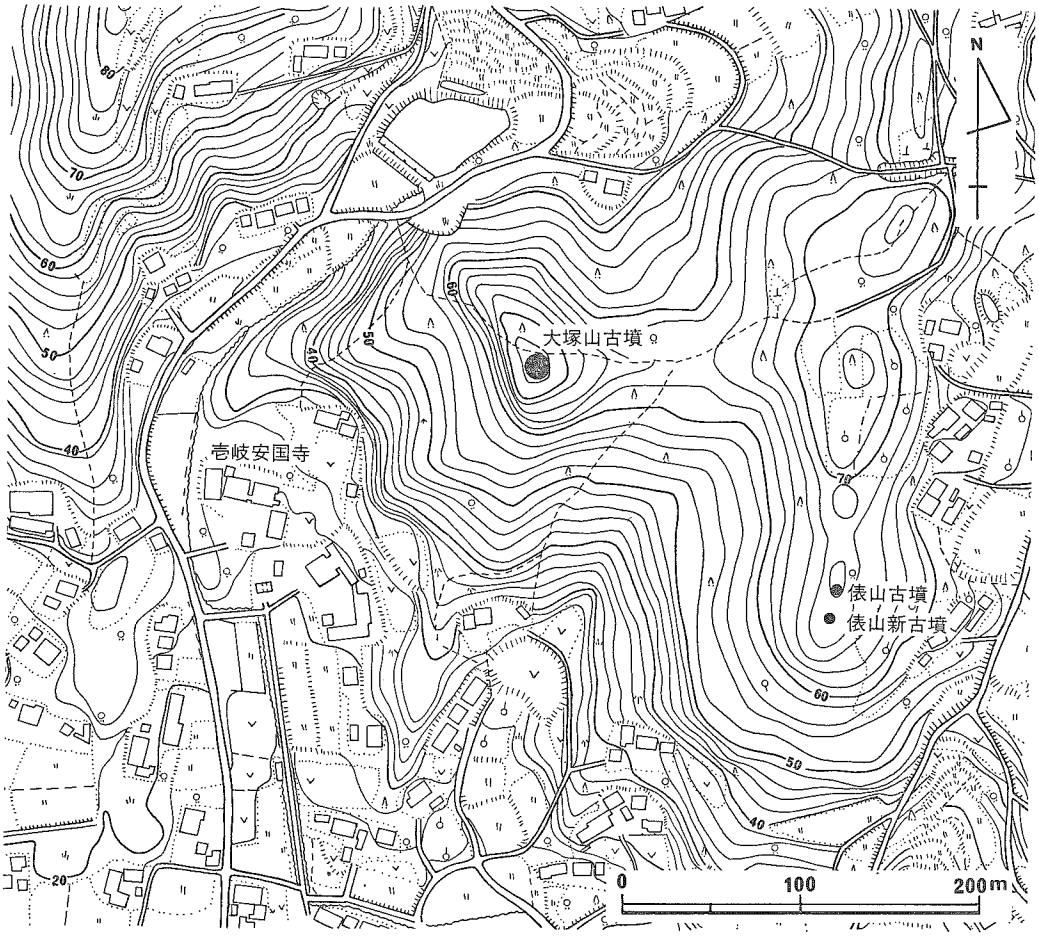


Fig. 2　周辺地形図

その結果，竪穴系横口式石室をもつ古墳で，石室は割石を小口積みした特徴をもち，石室の構築状況および嘗て発見された須恵器より，築造年代は５世紀後半頃に比定された。

また，石室の一部が破壊されており，早急な復元と保存処置を構ずる必要性が認識された。

更に，壱岐島において学術的に貴重な古墳であるため，県指定文化財（史跡）に指定の資料整備のため，再度発掘調査が実施されることになった。

昭和61年７月28日～同年８月９日（13日間）まで，芦辺町教育委員会は県教育委員会の指導を得て，墳丘の規模・石室の構築状況等についての補完調査[註4]を実施した。

昭和57年度の石室実測調査と昭和61年度の補完調査の結果を踏えて，大蔵氏より県指定文化財（史跡）の指定申請がなされ，昭和61年３月１日に史跡に指定された。（指定範囲は墳丘部分を含め，面積400㎡である。）

また，町教育委員会によって，石室の損壊部分の復元，石室に天井石を乗せるなど，保存処置と文化財の公開のための環境整備計画が策定中で，早急な実施が待たれる。

註１　長崎県教育委員会「遺跡地図」長崎県文化財調査報告書　第87集　1987

２　Ⅱ－３を参照

３　壱岐郡文化財調査委員会　長崎県壱岐郡芦辺町深江栄触所在「大塚山古墳」石室実測調査報告書　1983

４　本報告書掲載

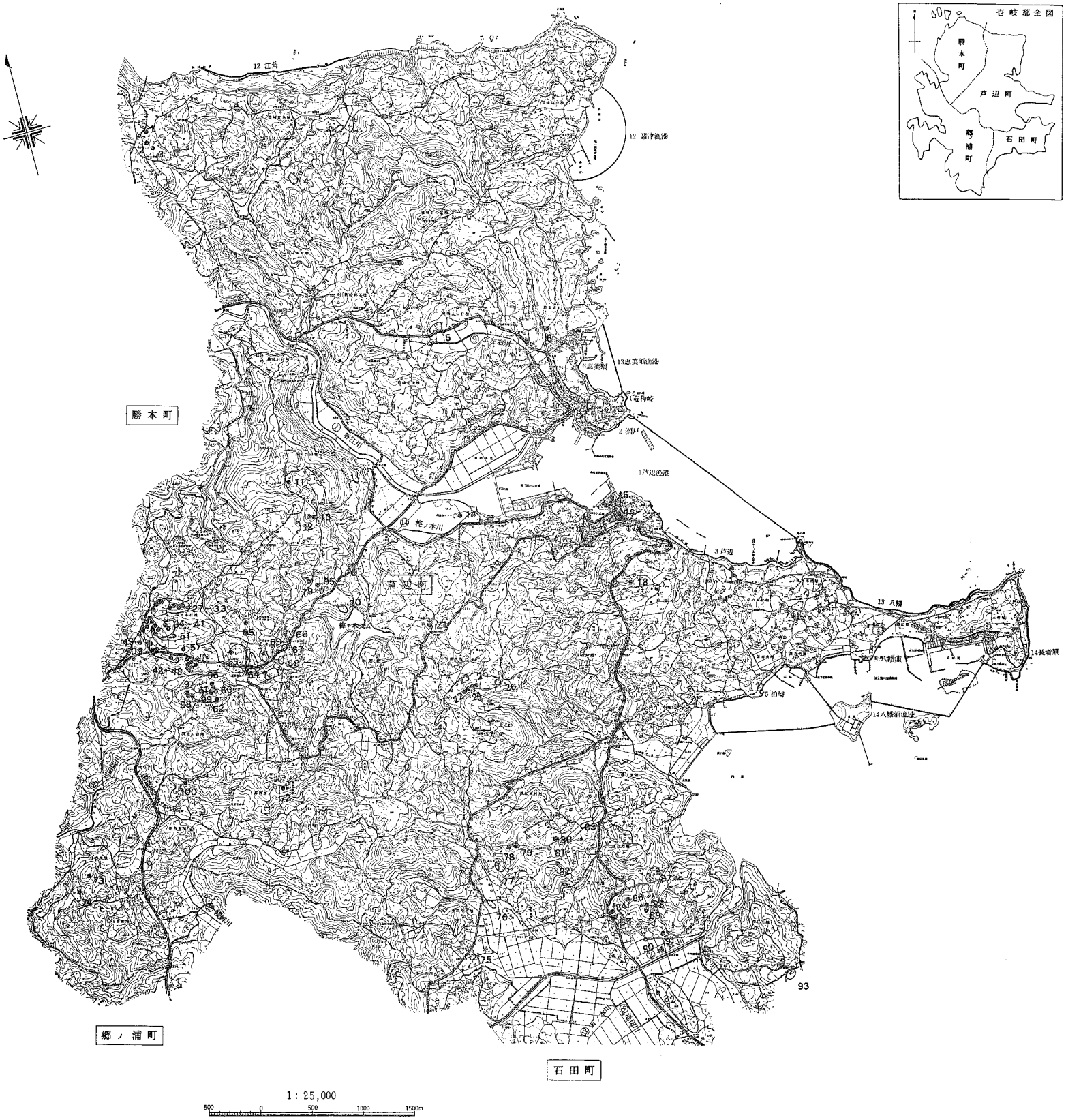


Fig. 3　芦辺町遺跡地図

Ⅱ　遺跡の地理的歴史的環境

1.　地理的位置と周辺の遺跡

壱岐島は九州と朝鮮半島との間に位置し，古くから大陸文化の伝播経路として，対馬と共に重要な役割を果してきた。

東西約15km，南北約17km程の面積約140km²を計る小島で，岳ノ辻の標高約213mを最高に，100m前後の低平な溶岩台地である。行政的には郷ノ浦，勝本，石田，芦辺町の4町に分れる。

大塚山古墳は壱岐郡芦辺町深江栄触字清水504－3番地に所在し，芦辺町の南端に位置し，島のほぼ中央を東に幡鉾川が流れ，その流域（町谷川，日の本川，池田川，小川の支流を含め）には広大な沖積地が形成されているが，その周辺の北岸に当る標高約72m程の低丘陵上に位置している。

古墳の眼下には原ノ辻遺跡の立地する丘陵を含め，深江田原が見渡せ，古墳の立地する丘陵裾野には14世紀中頃に建立された安国寺（県指定史跡）が存る。

また，主要地方道勝本・石田線（壱岐循環線）が原ノ辻丘陵から安国寺横を通っている。

芦辺町内には現在100箇所の遺跡[註4]が確認されている。

先土器時代～弥生時代にかけての複合遺跡は19箇所で，ナイフ形石器・細石刃・細石核などの先土器時代の遺物が採集された興触遺跡[註5]や大正時代[註6]から注目され，昭和26年，28～30年の東亜考古学会，昭和49年～52年にかけての県教育委員会，昭和60年の町教育委員会の発掘調査[註7]が実施された原ノ辻遺跡がある。数次に渡る調査の結果，弥生時代中期～後期の集落跡，墳墓群，溝状遺構と鉄器，土器，石器類の大量の遺物が出土し，先土器時代のナイフ形石器を主体とする石器群が検出されるなど，石田町を含めて広大な分布範囲を呈す。縄文時代の遺跡は大左右遺跡，貝原遺跡（黒曜石の原産地）などと少ない。

古墳時代の古墳が77箇所を数える。特に国分本村触周辺には釜蓋一号墳～七号墳，百田頭一号墳～八号墳，山ノ神一号墳～五号墳，兵瀬古墳，鬼の窟古墳（矢櫃古墳，県指定史跡），カジヤバ古墳[註8]など40基と集中している。また隣接する勝本町にも亀石古墳群，刳抜式家形石棺をもつ樹木古墳（県指定史跡），笹塚古墳，双六古墳（前方後円墳）など周辺一帯は墳墓域である。

中野郷東触には妙泉寺一号墳～五号墳など5基，本村触周辺には覩上山古墳，堂山一号墳～三号墳など5基，深江栄触周辺には大塚山古墳（本報告），昭和27年東亜考古学会で調査された竪穴式石室を有する俵山古墳（消滅）や俵山新古墳，玉塚古墳，鬼屋古墳（円墳）など5基と地域的に比較的集中を示す。

Tab. 1　遺跡地名表

番号	遺跡名	所在地	時代	種別	遺構　遺物　備考
1	江角一号墳	芦辺町箱崎江角触	古墳	古墳	竪穴式石室(？)。註1
2	江角二号墳	〃　〃	〃	〃	円墳，天井石露出。註1
3	江角三号墳	〃　〃	〃	〃	積石塚(？)
4	貝原遺跡	〃　箱崎本村触	縄文	散布地	剥片，黒曜石原石，黒曜石原産地。
5	大左右遺跡	〃　箱崎大左右触大左右	〃	〃	石鏃，剥片
6	津持遺跡	〃　箱崎大左右触津持	縄・弥	〃	剥片
7	恵比須一号墳	〃　恵比須	古墳	古墳	横穴式石室(玄室1.85m×1.8m)南西に開口。註1
8	恵比須二号墳	〃　〃	〃	〃	横穴式石室(玄室2.2m×1.6m×高さ1.6m)。註1
9	金比羅神社五輪塔	〃　箱崎大左右触	中世	五輪塔	2基(？)。
10	大久保古墳	〃　瀬戸浦	古墳	古墳	横穴式石室，東に開口。
11	岩名ノ辻古墳	〃　国分当田触	〃	〃	横穴式石室(玄室2.1m×1.5m)全長7m，南に開口。註1
12	一銭替古墳	〃　〃	〃	〃	横穴式石室(玄室2m×1.9m)円墳　註1
13	一銭替2号墳	〃　〃	〃	〃	註1
14	左京鼻碇石	〃　瀬戸浦	中・近世	石造記念物	黒雲母花崗岩，長さ2.42m，最大幅0.41m。
15	千人堂碇石	〃　芦辺浦安千人堂内	〃	〃	
16	役場号(仮称)	〃　芦辺浦滝の上役場横	〃	〃	
17	大師堂碇石	〃　芦辺浦田町大師堂停	〃	〃	
18	東我郎古墳	〃　諸吉東触	古墳	古墳	竪穴式石室or箱式石棺(？)，素文鏡1，獸形鏡1。
19	シオユカケ一号墳	〃　国分	〃	〃	横穴式石室(玄室2.7m×2m)，円墳，南と西に開口。
20	鶴翔城跡	〃　国分当田触	中世	城跡	応永年間(1394～1428年)，別称弦懸城，創建者塩津留氏，註2
21	大平野古墳	〃　中野郷仲触	古墳	古墳	横穴式石室。半壊。南西に開口。註1
22	妙泉寺一号墳	〃　中野郷東触	〃	〃	横穴式石室(石室4.5m)，円墳。註1
23	妙泉寺五号	〃　〃	〃	〃	円墳
24	妙泉寺二号墳	〃　〃	〃	〃	円墳(径20m，高さ6.3m)註1
25	妙泉寺三号墳	〃　〃	〃	〃	横穴式石室(石室7.5m)，円墳，南に開口。
26	妙泉寺四号墳	〃　〃	〃		消滅
27	釜蓋一号墳	〃　国分本村触字釜蓋838	〃	〃	横穴式石室(石室3.7m)，南と西に開口。註1
28	釜蓋二号墳	〃　〃　字兵瀬837	〃	〃	円墳(径14m，高さ6m)，封土が1/3消失。註1
29	釜蓋三号墳	〃　〃　844	〃	〃	横穴式石室(石室4.6m)，円墳。註1
30	釜蓋四号墳	〃　〃　857	〃	〃	横穴式石室，墳丘(径10m，高さ4m)，南と西に開口。
31	釜蓋五号墳	〃　〃　857	〃	〃	円墳(径15m，高さ6m)。註1
32	釜蓋六号墳	〃　〃　262	〃	〃	横穴式石室(石室3.3m)，円墳，南西に開口。註1
33	釜蓋七号墳	〃　〃　869	〃	〃	横穴式石室(半壊滅)，円墳。註1
34	百田頭一号墳	〃　〃　869	〃	〃	円墳。註1
35	百田頭二号墳	〃　国分本村触字兵瀬	〃	〃	円墳，南西に開口。註1
36	百田頭三号墳	〃　〃　881	〃	〃	円墳，半壊。註1
37	百田頭四号墳	〃　〃	〃	〃	横穴式石室，円墳(径6m，高さ1.5m)，南西に開口。註1
38	百田頭五号墳	〃　〃　字仮塚945	〃	〃	横穴式石室，円墳，舟の線刻。註1
39	百田頭六号墳	〃　〃	〃	〃	横穴式石室(石室5m)，円墳，南西に開口。註1
40	百田頭七号墳	〃　〃　950	〃	〃	円墳(？)。註1
41	百田頭八号墳	〃　〃	〃	〃	竪穴式石室(？)。
42	山ノ神古墳	〃　〃　字仮塚	〃	〃	横穴式石室(石室6m)，円墳，南と西に開口。註1
43	山ノ神一号墳	〃　〃　字京塚	〃	〃	前方後円墳(玄室のみ残し，崩壊)。註1
44	山ノ神二号墳	〃　〃	〃	〃	横穴式石室，南東に開口。註1
45	山ノ神三号墳	〃　〃　字仮塚948	〃	〃	横穴式石室(玄室2.4m×1.5m)，円墳。註1
46	山ノ神四号墳	〃　〃　935	〃	〃	円墳(径3.8m，高さ1.7m)，南に開口。註1
47	山ノ神五号墳	〃　〃　937	〃	〃	横穴式石室，円墳。註1

48	小オニア古墳	芦辺町国分本村触	古墳	古墳	大部分壊滅
49	柴取神辻二号墳	〃 〃 字仮塚957	〃	〃	横穴式石室，円墳，ゴルフ場建設で消失。註1
50	柴取神辻四号墳	〃 〃	〃	〃	円墳。註1
51	兵瀬古墳	〃 〃 字兵瀬	〃	〃	横穴式石室(石室12m)，南と西に開口。周湟。註1
52	矢櫃古墳(鬼の岩屋)	〃 〃	〃	〃	横穴式石室(石室16m)，円墳，南と西に開口，県指定史跡。註1
53	京塚山一号墳	〃 〃	〃	〃	横穴式石室，円墳。註1
54	京塚山二号墳	〃 〃	〃	〃	竪穴式石室(？)。註1
55	京塚山三号墳	〃 〃	〃	〃	竪穴式石室，東南東に開口。註1
56	京塚山四号墳	〃 〃	〃	〃	円墳。註1
57	京塚山五号墳	〃 〃	〃	〃	積石塚。註1
58	京塚山六号墳	〃 〃	〃	〃	横穴式石室。註1
59	京塚山七号墳	〃 〃	〃	〃	円墳。
60	小原1号墳	〃 国分川迎触30	〃	〃	横穴式石室，円墳，道路により墳丘半壊。註1
61	小原2号墳	〃 〃	〃	〃	円墳，道路により半壊。
62	カジヤバ古墳	〃 〃	〃	〃	円墳，道路により半壊。註1，8
63	国分寺跡	〃 国分本村触	奈・平	寺址	礎石，県の指定史跡。
64	壱岐氏居館跡	〃 国分国片主神社敷地	〃	館跡	空堀，土塁。
65	館遺跡	〃 国分本村触字館山	古・奈	包蔵地	たたら遺構，須恵器，土師器，鉄片。註3
66	月読神社前遺跡	〃 国分東触	弥〜中世	散布地	弥生式土器，土師器，須恵器，青磁。
67	大谷第1遺跡	〃 〃	弥・古	〃	弥生式土器，土師器，須恵器。
68	大谷第2遺跡	〃 〃	〃	〃	〃
69	大谷第3遺跡	〃 国分本村触	縄〜中世	〃	弥生式土器，土師器，須恵器，高麗青磁，鉄滓。
70	郡城跡	〃 国分東触	中・近世	平山城	註2
71	通触遺跡	〃 中の郷通触	弥・古	散布地	弥生式土器，須恵器，石斧，剥片，近世陶器。
72	ムギカミ神社古墳	〃 中の郷西触	古墳	古墳	横穴式石室，天井石露出，半壊。註1
73	下松1号墳	〃 住吉後触	〃	〃	横穴式石室，円墳。註1
74	下松2号墳	〃 住吉後触下松927	〃	〃	横穴式石室，円墳，半壊。
75	興触遺跡	〃 湯岳興触	先〜古	散布地	細石核，石鏃，須恵器。
76	都城遺跡	〃 湯岳分坂触	弥〜中世	散布地・古墳	弥生式土器，高麗，季朝青磁。
77	定光寺前遺跡	〃 湯岳本村触	〃	散布地	弥生式土器，土師器，須恵器，中国青磁。
78	覩上山一号墳	〃 本村触明細	古墳	古墳	前方後円墳。註1
79	覩上山二号墳	〃 本村触辻ノ米176	〃	〃	前方後円墳，半壊。註1
80	堂山一号墳	〃 南触堂山	〃	〃	円墳。註1
81	堂山二号墳	〃 〃	〃	〃	横穴式石室，円墳。註1
82	堂山三号墳	〃 〃	〃	〃	
83	深江本村	〃 深江本村触	弥〜近世	散布地	土師器，須恵器，白磁。
84	壱岐国安国寺跡	〃 深江栄触	中世	寺跡	開山1283〜1358(？)年。
85	安国寺前遺跡	〃 〃	弥〜中世	散布地	弥生式土器，土師器，須恵器，白磁，青磁。
86	大塚山古墳	〃 〃	古墳	古墳	竪穴系横口式石室，円墳，須恵器，本報告書掲載。
87	鶴亀鬼屋	〃 深江鶴亀触	〃	〃	横穴式石室，半壊。
88	俵山古墳	〃 深江鶴亀触俵山	〃	〃	竪穴式石室，円墳，現状不明。
89	俵山新古墳	〃 鶴亀触稲荷神社前	〃	〃	円墳。
90	ミヤクリ遺跡	〃 深江鶴亀触ミヤクリ	弥生	墳墓	甕棺，箱式石棺。註5
91	玉塚古墳	〃 深江栄触玉塚	古墳	古墳	
92	原の辻貝塚	〃 深江鶴亀触鶴亀原の辻	弥生	貝塚	集落址，墳墓群，貝塚，石田町を含めた分布範囲。註6，7
93	迚の辻遺跡	〃 深江平触迚の辻	〃	墳墓	甕棺，箱式石棺。
94	青島遺跡	〃 青島	弥・古	散布地	弥生式土器，剥片。
95	シオユカケ2号墳	〃 国分	古墳	古墳	石室の側壁，袖石が残る，規模不明。
96	大原3号墳	〃 国分川迎触字大原	〃	〃	天井石，側壁が残る。
97	平原3号墳	〃 〃	〃	〃	墳丘および石室が半壊，土師器出土。

98	大原2号墳	芦辺町国分川迎触字大原	古墳	古墳	天井石，側壁が露出。
99	大原1号墳	〃 〃	〃	〃	横穴式石室。
100	長野古墳	〃 住吉東触長野上	〃	〃	円墳，天井石が一部落石。カジヤバ古墳と構築状境が類似。

以上の古墳の中で，覩上山一古墳～二号墳，山ノ神一号墳（？），双六古墳は横穴式石室を有する前方後円墳で，他は横穴式石室を有する大小の円墳である。また，百田頭五号墳の舟の線刻，妙泉寺一号墳，大塚山古墳の石室内に酸化鉄を塗布され，山ノ神五号墳は石室内に同心円文の線刻がある。これらの築造年代は五世紀代の俵山古墳，大塚山古墳，覩上山古墳（？）と他は六世紀～七世紀に比定されている。

古墳時代～近世にかけての遺跡は大谷第１～３遺跡，月読神社前遺跡などの遺物包含地と礎石が残る壱岐国分寺跡，郡城跡，山城の鶴翔城跡などが国分周辺にみられる。

註１　松永泰彦「壱岐島北部における古墳の現状」『壱岐』第15号　壱岐史蹟顕彰会　1981
　２　日本城郭大系　17　長崎・佐賀　新人物往来社　1980
　３　昭和45年７月に県教育委員会・町教育委員会が九州大学の協力を得て発掘調査を行った。
　４　長崎県教育委員会「遺跡地図」長崎県文化財調査報告書　第87集　1987
　５　長崎県教育委員会「原ノ辻遺跡」長崎県文化財調査報告書　第31集　1977
　６　松本友雄「先史時代の壱岐研究」1929
　　鴇田忠正「長崎県壱岐郡田河村原の辻遺跡の研究」日本文化史研究　1944
　　水野清一・岡崎　敬「壱岐原の辻弥生式遺跡調査概報」（対馬の自然と文化）　1954
　７　昭和49年に畑地の水田化に伴う緊急発掘調査で甕棺51基，石棺19基，溝４条を検出。
　　昭和50年～53年に範囲確認調査が実施された。昭和60年の調査は深江池の浚渫工事に伴う調査である。
　８　昭和61年に町道川迎線改良工事に伴う緊急発掘調査が町教育委員会で実施された。六世紀末～七世紀にかけての円墳。石室の移築復元が行われた。

2.　白華和尚の古文書

『大塚山古墳に関する古い資料は２点[註1]ある。古墳の発掘を記した文書と出土遺物の瑯がそれである。このうち墨描略図を付した文書は，壱岐安国寺の白華和尚[註2]の筆になるものである。

本文書の冒頭は虫食いで，「廿七日」の日付けのみ判って年号と月は不明である。がこれは出土遺物の瑯を収めた木箱の箱書きに「安政二年二月廿七日堀[ママ]出」とあるので，文書の不明年号等は箱書きのそれと同じ安政２年（1855）２月とみてよいであろう。

□廿七日午後拾薪童子卒然而至日大塚山ノ東二十餘歩□地
□其ノ石下有穴候故伺見候處石垣ニして其中者廣何之穴ニ而候哉ト
□来候不肖意□是必古塚也手携鴉觜□而見候處先長持ノ
入程ノ穴して四面石垣其中□虚也其石ヲ掘(ママ)候處□石也
其石上ニ如図掛花生ヲ得候色黒ニして□薬
恰如黒鉄甚重シ夫ゟ段々掘候處都合
蓋(フタ)石四枚アリ各拾人持餘ノ平石ニ候不肖童子ノ
手ニ及兼候故忍(*)松一華伊三郎(石アツカヒ名人)ヲ呼松ヲ
截リ根ヲ取大石ヲ取揚候處畳一枚敷餘ニして
深リ四尺斗也其中空也又夫ゟ其中ノ土ヲ掘出候處
濱石壱荷餘モ掘リ出申候外ニ何ニモ無之□是一字一石ノ
法華塔歟トモ存候得とも法華ニしてハ石不足ニ候又其石垣ノ
内ノ空虚カ難解候　——以下略——

＊ 忍松庵(にんしようあん)，一華庵(いつき)はともに安国寺の塔頭。

冒頭に記事の一部を掲げたが，読み下し文は付さず釈文のみに留めた。文意はこれでお判りいただけると思う。

壱岐の古墳について記した江戸時代の資料は他に『壱岐国続風土記』[註3]『未刊甲子夜話』[註4]『壱岐名勝図誌』[註5]等の著書が挙げられる。これらは島内に所在する古墳を村別に記録し，代表的な古墳は規模を書き，それに簡単な実測図や見取図またスケッチなど付しており，確かに古墳研究には欠かせぬものではある。が白華和尚の文書は，1基についてではあるが古墳発掘の経緯に考察を加えている点が特異で，上記の資料とは趣を違えている。壱岐にあっては甚だ貴重な資料といえる。』

（横山　順）

註1　郡内芦辺町深江栄触545番地の大蔵元廣氏（医師）所蔵。
2　『長崎県人物伝』長崎県教育会　1919
　　服部顕道『老松山安国海印禅寺史』壱岐日報社　1960
3　吉野秀政『壱岐国続風土記』（寛保2年<1742>）
4　松浦静山『未利甲子夜話』第2巻之31（天保7年<1836>）　有光書房　1969
5　後藤正恒・吉野尚盛『壱岐名勝図誌』上・中・下　（文久元年<1861>）　名著出版　1975

本資料は大蔵元廣氏のご厚意によって掲載した。記して謝意を表したい。

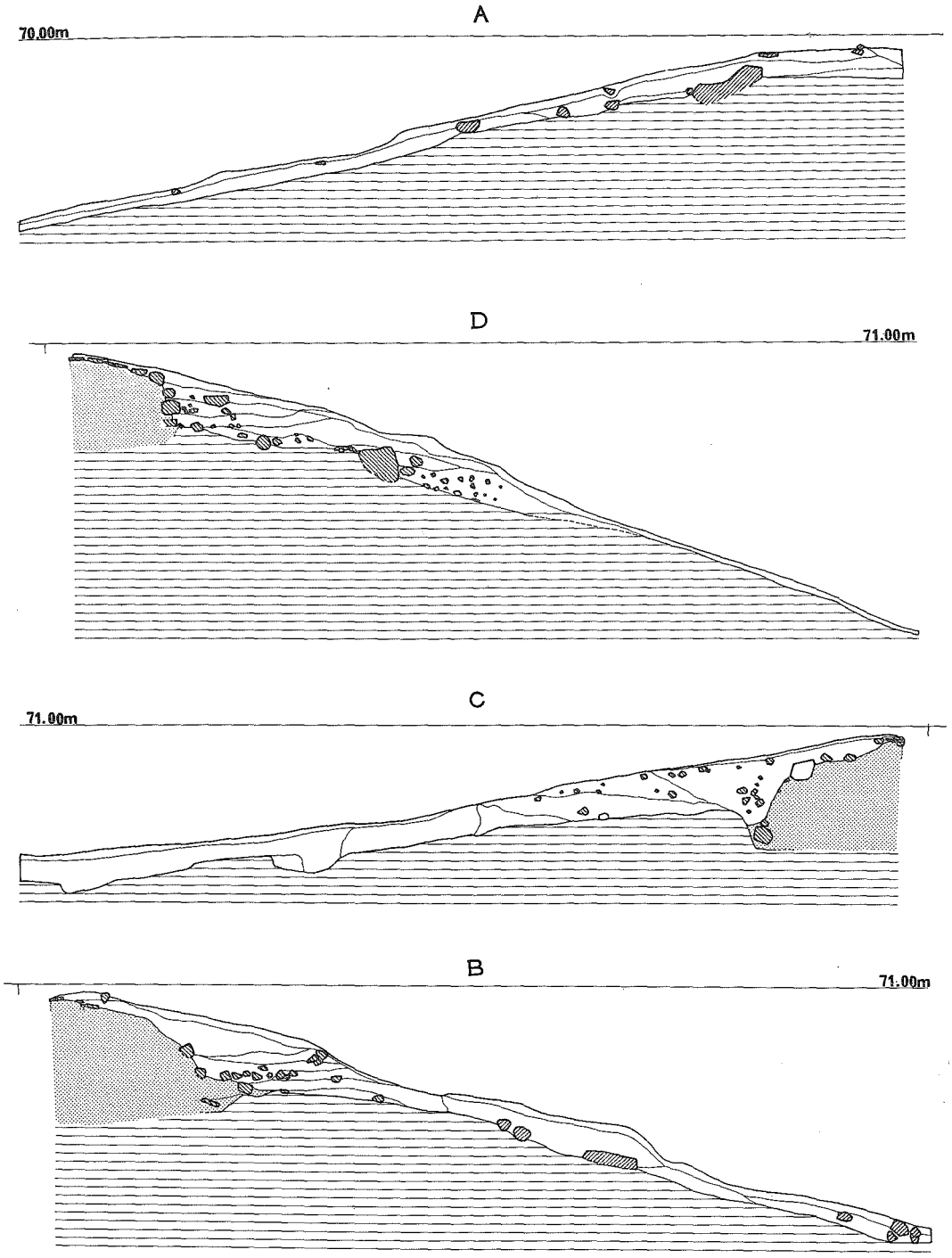


Fig. 4　墳丘土層断面図（1／80）

Ⅲ 調　　査

1. 墳丘実測調査

(1) 墳　丘

比較的に傾斜の急な丘陵（寺山）の連なる一山頂部に占地する。つまり，地形的な制約を強く受け，大きな墳丘を築くことは不可能であったと考えられる。従って，墳丘そのものは，ゆるやかに，マウンドを成す程度であり，しかも，時間の経過とともに，かなりの土砂（盛土）の流出があったものと思われる。また，本古墳の構築状況は今回の調査で，かなり把握することができたと考えられる。第４図でもわかるように，山頂部を竪穴状に掘り込み，石室を構築している。次に，その掘り込みに合わせるようにして，裏込めに大小の礫を用いて，一気に盛土を行ったと考えられる。そして，周辺にかけて，いくつかの版築状の盛土を行っている。盛土の状況は，礫が多く混入し，崩壊等も考えられるが，石室を覆う程度のものであったと推定される。全体的に見て，石室などと比べると，やや粗雑な観が強かった。

なお，確認された，墳丘裾部から推定される当初の墳丘規模は，山頂部（石室）を中心とした直径およそ14ｍの円墳である。

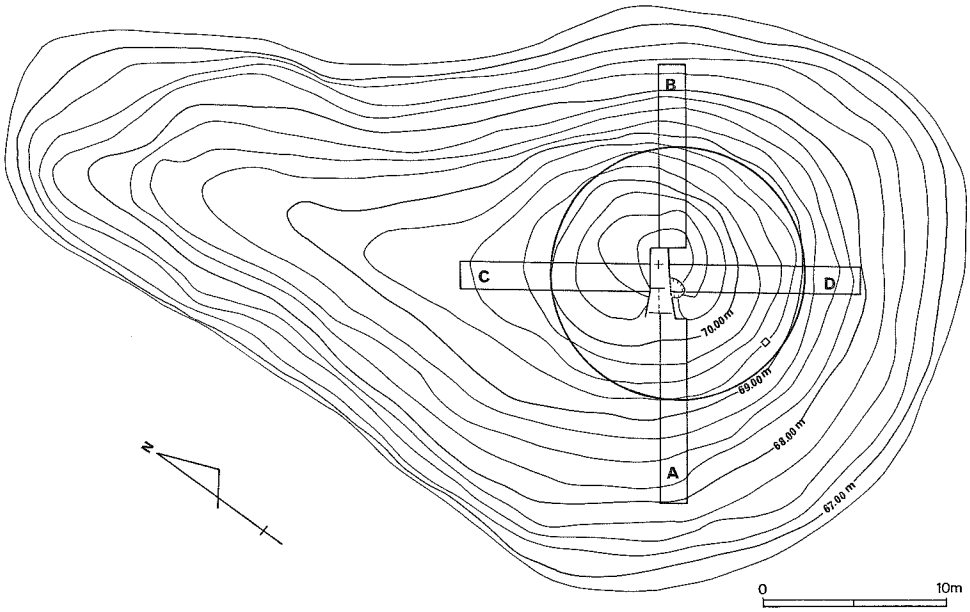


Fig. 5　墳丘実測図及びトレンチ配置図

(2) 石　室

石室の構築状況については実測調査[註1]が実施されているので，詳細については本書Ⅲを参照。

今回の調査で石室の長短軸にそって，Ａ～Ｄトレンチ（1.5ｍ×10ｍ）を４箇所設定し，調査を実施した。

石室の中心部より東南（Ｄトレンチ）へ2.8ｍ，北西（Ｃトレンチ）へ2.9ｍ，奥壁側（Ｂトレンチ）に2.5ｍ程の範囲を約0.2ｍ程地山を掘り込み，平坦にして石室を構築した状況が確認された。

横口前面部は玄室と横口部分を任切石（１枚の板状石を利用）で区切った横口部分に人頭大位の礫を幅0.9ｍ，長さ0.6ｍ程の範囲に，平らに敷き詰めている状況が検出され，閉塞時に石を置いた状況とは相違を示しているようだ。石室実測時に指摘された「敷居石」の在り方に類似するようだ。

また，Ａトレンチの調査では，墓道の痕跡は見られなかった。

註１　壱岐郡文化財調査委員会「大塚山古墳」石室実測調査報告書 1983

(3) まとめ

今回の調査は大塚山古墳の補完調査として墳丘測量，石室の構築状況調査を実施し，県指定史跡に申請し，修復および保存を行うための調査であった。

石室構造は所謂竪穴系横口式石室で横穴式石室である。天井石は既に失なわれている。

墳丘調査はＡ～Ｄトレンチを４箇所設定し調査の結果，径14ｍ，高さ２ｍ（現計）程の円墳で，６枚の版築状況が観察され，石室は地山を掘り込み，割石を小口積みにし，裏側に巨石を利用しておさえた裏込めの状況が明らかになった。また，墓道については確認出来なかった。

遺物は石室内より黒曜石製剝片１点が出土した。

壱岐の古墳は多数確認[註2]されているが，発掘調査が実施され，報告書が出された古墳は僅かであるので，詳細については不明な点が多い。

県教育委員会は昭和60～61年度（補完調査も含め）に詳細分布調査を実施し，遺跡地図[註1]が刊行されているが，今後更に主な古墳についての墳丘調査，石室実測が早急に実施されることが待たれる。その後に壱岐における古墳の変遷等考慮することが必要であろう。

註１　長崎県教育委員会「遺跡地図」長崎県文化財調査報告書　第87集 1987
　２　註１の「遺跡地図」によると，昭和61年２月現在257基が確認されている。

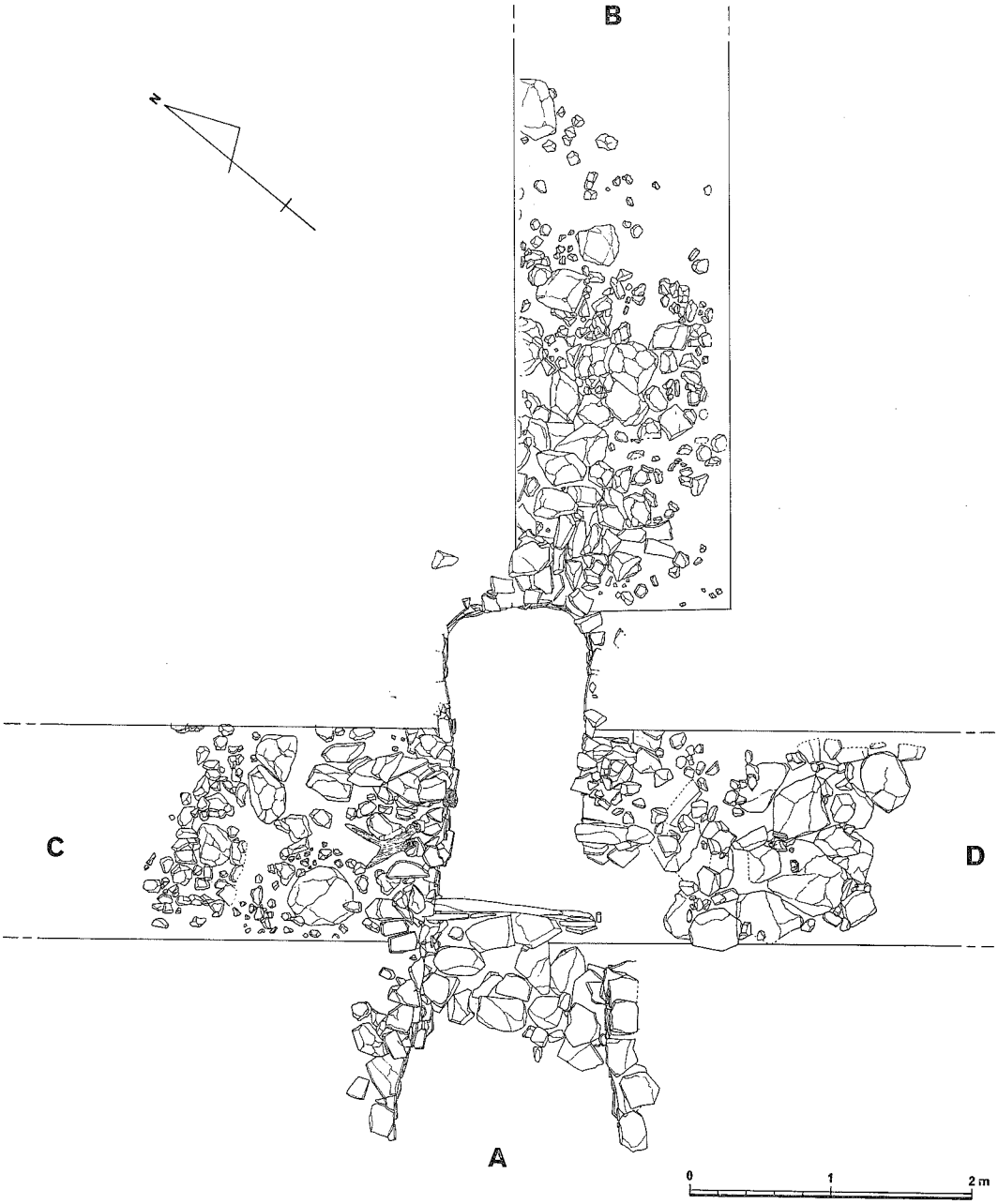


Fig. 6　B～Dトレンチの石室裏込め状況平面図

2. 石室実測調査

(1) 石　室

石　室

『石室はN—53°—Wに開口する横穴式石室で，所謂竪穴系横口式石室の範疇に入るものである。天井石[註1]は既に失なわれ，また右側壁は一部破壊されており，調査前には石材が落ち込んでいたが，全体的にみれば保存状態は良好といってよいであろう。奥壁，左右側壁とも玄武岩の板石を小口積みしており，石材の厚さは最も厚いものでも12～13cm程度である。玄室部の壁体は奥壁，側壁ともゆるく持ち送られているが，横口前面部の側壁は持ち送られずほぼ垂直に積まれており，またその積み方は玄室部に比べると雑である。

奥壁と両側壁との隅角では床から30～65cm[註2]程度の範囲では両側壁が奥壁を挟み，その上下では逆に組みあわせられており，床から約95cm以上の範囲では両壁に石材が掛け渡されている。すなわち床から約95cmの範囲までは不連続ながら目路が通り，その上では隅丸となる。

右側壁は横口部付近で破壊されているが，その断面からみてかなり広い範囲に控え積みを有することが知られる。また壁面の一部（特に奥壁中位）にはベンガラが残っており，本来は全面に塗布されていたものと思われる。

石室は横口前面部の側壁を含めて主軸上で全長3.96mを測る。玄室高は天井石が失なわれているため正確には不明であるが，ほぼ現高に等しく1.4m程度であろう[註3]。以下，玄室，横口部，横口前面部に分け略述する。』

玄　室

『主軸上での長さ2.27m，左側壁長2.24m，奥幅1.28m，前幅1.18m（推定）を測り，平面プランはわずかに羽子板状をなす。

現在露出している床には多数の親指大の小礫が敷石状に残存しているが，その分布には偏りがあり，また移動も認められる。特に横口部寄りは空白となっており，白華和尚の文書の「濱石壱荷餘モ掘リ出」したとされる部分に当たると思われる。これらの小礫は幾重かに敷かれており，また奥壁，左右側壁はこの現在の床よりさらに数段の石材を有するようであり，地山面はさらに10cm程度下にあるとみられる。

床に残った施設で注目されるのが横口部に立てられた板石の中央部に接して立つ厚さ約3cmの板石である。各面は平滑に加工されており，やや主軸方向とはずれて立っているが石室が盗掘などにより撹乱されていることから考えて，本来はこれに連続して石室を2分するように仕切石が立てられていたのではないかとも思われる[註4]。しかしながらこの板石以外にそれらしい石

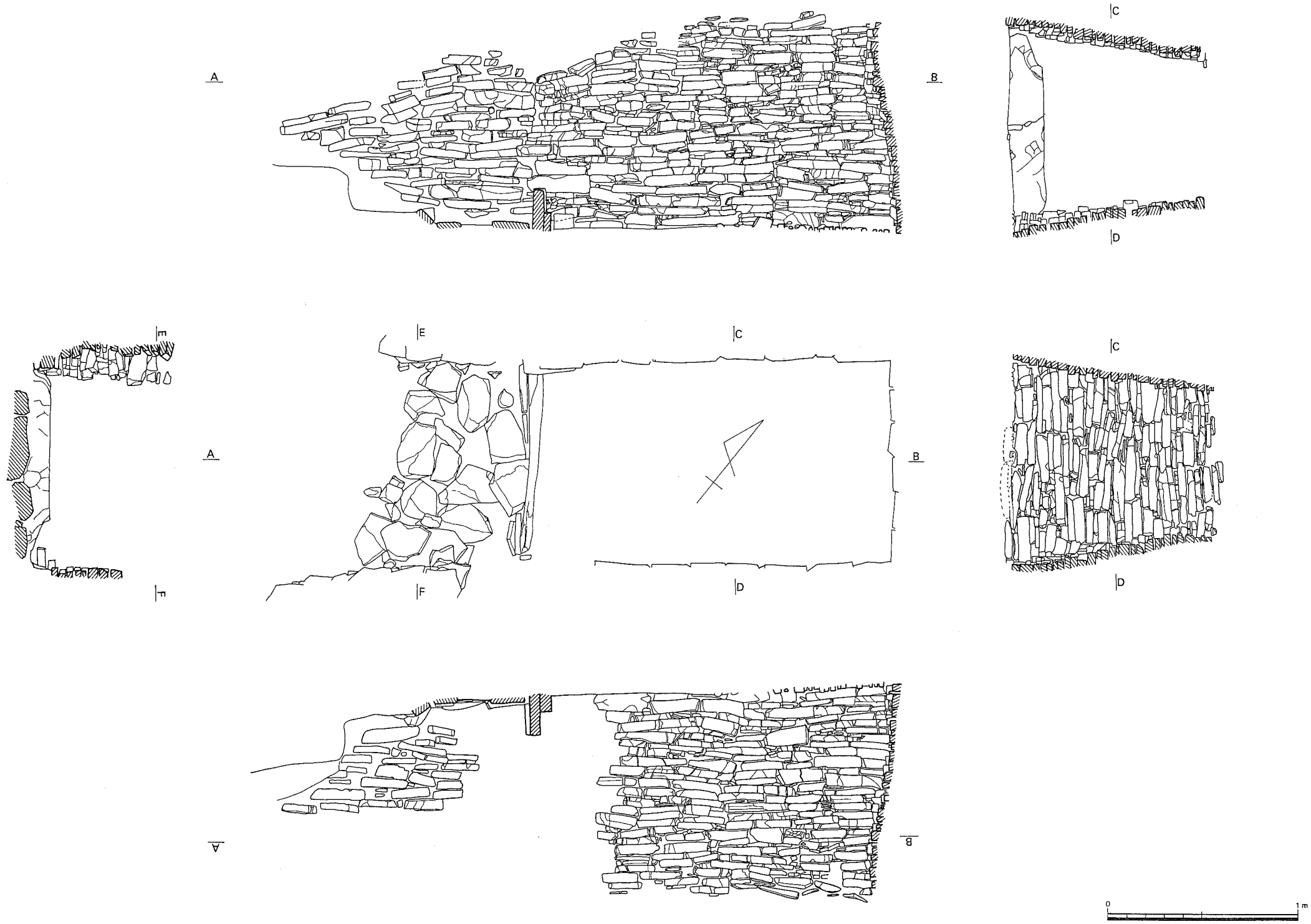


Fig.7 石 室 実 測 図

材は見当たらず，また他の部分ではそのような板石が立てられていた痕跡は見当たらない。現状ではその可能性を指摘するにとどめたい。』

横口部

『本石室の大きな特徴はこの横口部にある。すなわち袖石，或いは袖石状の施設を有さず，床には玄室幅と等しい長さの厚さ7～8㎝の板石（以下仕切石と呼ぶ）を垂直に立てている。この仕切石は各面を平滑にするため丁寧に加工が加えられており，左側壁に接する部分では側壁との隙間をなくすためか隅丸に加工されている。右側壁寄りは欠損しているが，これは右側壁の破壊時と同時の所産であろう。横口前面側には仕切石に接するように4枚の板石が小口を上面にして存在しているが，これらは仕切石を安定させるために用いられたものと考えられる。』

横口前面部

『横口前面部には床に図示したように多くの板石が存在する。閉塞施設を全く残しておらず，この部分も撹乱を受けていると考えられることから現状が本来の姿であるかは不明であるが，この部分の側壁が仕切石の上面より低い位置から構築されていることからみて，床のレベルはほぼ現状程度であったと考えられる。とすると長崎県大村市黄金山(こがねやま)古墳[註5]石室などにみられる同様な板石の框石的な用い方とは異なり，むしろ三重県志摩郡阿児(あご)町おじょか古墳[註6]石室にみられる前障状の「敷居石」などのあり方に類似する。竪穴系横口式石室の多くの例にみられる横口部の段を墳頂からかなり深い位置に構築された石室の横口部へ墓道を接続し，また墓道の空間を維持するために設けられたものとみなすことができるなら，本墳の場合は低平な墳丘ゆえにそうした構造をとる必要がなかったものとみられる。』

註1　安政期には天井石は残っており，白華和尚の文書によると「蓋石四枚」とあるが，石室の見取り図では直接石室を覆っているのは3枚であり，その上にもう1枚がのっており，おそらくこれが本来の姿であると思われる。

2　ここで記す床からの高さは奥壁と右側壁との成す隅角の部分におけるおよその値である。

3　なお左側壁は横口部付近で高さを減じているが，これはこの部分の木の根のため石材が脱落したことによる。

4　玄室幅からも2体葬である可能性は強い。

5　小田富士雄「長崎県大村市黄金山古墳調査報告書」『九州考古学』39・40　1970

6　小玉道明ほか『志摩おじょか古墳発掘調査概要』　阿児町教育委員会　1968

(2) 出土遺物

『徹底した盗掘を受けているため，遺物は安政2年に採集された須恵器と今回，石室前面の墳丘上から表採された鉄器の2点しか知られていない。

須恵器

小型の瑳である。器高11.8cm，口径10.1cm，頸部基部径4.4cm，体部最大径11.9cmを測る。（口縁部が⅓程度欠けているため，口径のみは復元値である。）頸部は細く外反しながら上方に延び，比較的シャープな稜をなして，直線的に外上方に延びる口縁部に連らなる。口縁端部は外側に折り曲げられており口唇部はわずかに凹面をなす。体部はその最大径を上部⅓にとる肩が張った形態をなし底部は丸く安定性を欠く。頸部には7本単位の，体部には2本の沈線の間に6本単位の波状文が施され，体部の波状文上には径1.3cmの円孔がやや下方に向って穿けられている。体部の下部⅓以下の外面には平行線叩き目を残しており，また内面の一部には指おさえ状の痕がついている。その他の部分の調整は回転ナデによっている。ロクロ回転は左回りである。胎土には比較的多くの砂粒を含み，焼成は堅緻で灰黒色を呈する。口縁部内面と肩部外面には自然釉が認められる。なお底部外面には「大塚山ヨリ堀出し花生」の墨書がある。

体部外面の叩き目

上述したように体部の下部⅓以下には平行線叩き目が明瞭に残っている。PL.8[註4]下段は底部側からそれをみたものであり，→は円孔の位置を示している。叩き目はその方向により5群に分けられ，それぞれの重なり具合から叩き締めは底部側からみて時計回りに進行していること

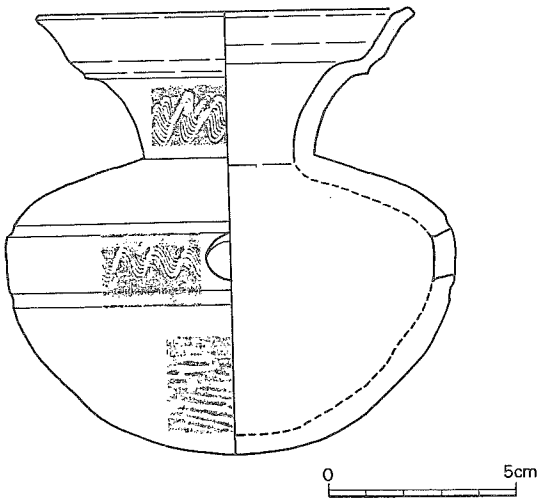


Fig. 8　出土遺物実測図

がわかる。つまり叩き締めは工人が土器を手に持ち叩きやすい範囲を叩き締めた後，¼～⅛程度左回りに回転させ，同じ作業を繰り返して行なったものと考えられる。[註1] これに対応する内面は詳しく観察ができないが，粘土帯の継ぎ目と思われる位置に一周して指おさえ状の痕がみられるだけであり当て具痕はみられない。

このような小型の瓹に叩き目を残す例は少なく，乏しい筆者の知見では数例にすぎない。[註2] また大型の瓹についても同様である。[註3] これらはいずれも体部最大径が口径を上回るという特徴があり，陶邑編年Ⅰ型式に平行する段階のものである。小型瓹の体部の成形も基本的には粘土紐をまきあげ叩き締めを行なったとみられるが，多くは調整段階でその痕をなで消している。少数ながら本例のように叩き目を残す例が時期的に集中してみられることはこれらが偶然ではなく意図的な産物であったことを示している。しかし，同時期の製品でも叩き目をなで消す例が圧倒的に多く，これらは特殊な例とみていいだろう。

鉄器

長さ4cmほどの小片で，両端を欠損しているが，その屈曲の具合や大きさからみて蕨手刀子（わらびでとうす）の把の部分ではないかと思われる。一部に繊維質かとみられるものの付着が認められるが，銹のため詳細は不明である。』

註1　横山浩一「須恵器の叩き目」『九州文化史研究所紀要』25　1980

2　埼玉県行田市埼玉稲荷山古墳(伝)(斎藤忠ほか『埼玉稲荷山古墳』埼玉県教育委員会　1980)
大阪府堺市陶邑ＴＧ203号窯同ＴＧ225号窯(中村浩ほか『陶邑』Ⅱ大阪府教育委員会　1977)
同ＴＧ42窯（中村浩ほか『陶邑』Ⅲ大阪府教育委員会　1978）
広島県広島市地蔵堂山２号墳（新谷武夫「安芸・備後の古式須恵器」『古文化談叢』5　九州古代文化研究会　1978）
なお地蔵堂山２号墳例は舶載品と考えられている。（中村浩『須恵器』ニューサイエンス社　1980）

3　大阪府堺市四ツ池遺跡（『世界陶磁全集』２－日本古代　小学館　1979）
同陶邑ＴＧ39－Ⅳ号窯（中村浩ほか『陶邑』Ⅱ　前掲）
福岡県久留米市祇園山古墳裾部外周（石山勲ほか『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告書』XXⅦ　福岡県教育委員会　1979）
福岡県甘木市池ノ上Ｄ－４棺内（橋口達也ほか『池ノ上墳墓群』甘木市教育委員会　1979）など。

4　壱岐国研究会「大塚山古墳」壱岐郡文化財調査委員会（1983）のＰＬ．８を参照。

(3) まとめ

『今回の調査により大塚山古墳は立地，石室構造など幾つかの点で，既知の壱岐の古墳とは異なる特徴をもつ古墳であることが明らかになった。以下，本墳をめぐる幾つかの問題について若干の検討をしたい。

立　地

本墳は原ノ辻遺跡もその一角を占める壱岐最大の平野「深江田原」を見降ろす標高74mの丘陵の最高所に位置しており，南の平野側から見上げるとこの丘陵は三角形に近い端整な姿をしている。後期の横穴式石室を内部主体とする古墳が大部分を占める壱岐においてはこのような立地をとる古墳は数少なく，築造時期の違いと共に被葬者の性格の違いをも推測させる。丘陵の最高所という占地の制約から墳丘は小型であるが，墳丘を構築する目的のひとつとしての視覚的効果を考えるなら，本墳の場合は丘陵自体がその役割を果たしているといえよう。

石　室

石室は南西に開口する横穴式石室で，所謂竪穴系横口式石室に属するものである。その特徴としては

1. 壁体はすべて玄武岩の割石を小口積みにしており，控え積みを有する。
2. 玄室の平面プランはわずかに羽子板形をなす。
3. 横口部には袖石がなく，一枚の板石を垂直に立てている。
4. 横口前面にはやや外広がりの側壁が構築されている。

などの点が挙げられる。いずれも他の竪穴系横口式石室に類例のみられる特徴であるが，これらの中で本石室を最も特徴づけるのは3の横口部の構造であろう。

竪穴系横口式石室の中で横口部に袖石，或いは袖石状施設を配さない例はあまり多くなく20例を超えない[註1]。これらは主に玄界灘沿岸に分布しており背振・筑紫山地以南には少ない[註2]という面があるが，その中で壱岐とは地理的，歴史的に関係の深い唐津湾沿岸地域に7例[註3]がみられ，この地域に所在する竪穴系横口式石室の大半がこの類に属することは注意される。これらの諸例に総じていえるのは横口前面には側壁が構築されず，また玄室は比較的小型で，その高さも1.1mを超えず，先行する小型竪穴式石室の伝統を色濃く残していることである。またその墳丘も小規模で迫頭（さとがしら）古墳群に代表されるように在地性の強い性格が窺われる。これらの諸例と大塚山古墳石室を比較してみると，玄室規模は近似しているものの玄室高や横口前面の側壁の有無などの点で異なり，大塚山古墳石室のほうがより横穴式石室としての性格を強くもつと言える。

他地域の例の大部分も唐津湾沿岸の諸例に似て玄室高は低く，横口前面の側壁は構築されな

いか，構築されてもごく短く終わっている。これらは在来の墓制の影響を強く残しており，横口を設けるにあたっても一方の小口壁を単に省略することによってそれを果たしたというような点がみられる。福岡県福岡市南区老司古墳[註4]の1号，2号，4号石室にもそのような性格が認められる。また古墳群内部に於いては福岡県宗像市久戸古墳群[註5]や同県山門郡瀬高町名木野古墳群[註6]などでは，これらの袖石を有さない竪穴系横口式石室が袖石を有する竪穴系横口式石室に先行して築造されている。

これに対して大塚山古墳石室に近似する例としては福岡県行橋市稲童8号墳[註7]石室が挙げられる。稲童8号墳は周防灘沿岸の丘陵上に築造された径18mの円墳で西に開口する竪穴系横口式石室を有している。玄室は長さ2.8m，奥幅約1.2m，前幅約0.9mを測り，横口前面には1mを超える外開きの側壁が構築されている。壁体は基本的には割石小口積みで控え積みを有しており，石室閉塞は横口部で一枚の花崗岩を用いて行われている。

この稲童8号墳と大塚山古墳の両石室は平面プランはやや異なるものの壁体の構成や横口前面部側壁のあり方など近似する点が多くみられ，前記の諸例とは異なり本来袖石を有する石室から袖石を取り除いたような石室形態をしている。一般的に竪穴系横口式石室の袖部の構成は老司古墳3号石室のように小口壁の中央上部省略したものから板石を左右に立て袖石とするものへ，さらに槐石を立てるか槐石を積みあげるものへという変遷が辿られるが[註8]，このうち板石を立て袖部を構成する手法は主に5世紀中葉から後半に比定される大型の石室に採用されている。その代表例としては福岡県糸島郡二丈町釜塚古墳[註9]石室が挙げられるが，この釜塚例や稲童21号墳[註10]石室などでは板石の袖石は天井石を支えておらず袖石が必ずしも構造上不可欠なものではなかったことを示している。稲童8号墳石室や大塚山古墳はこのような大型の石室をモデルとして小型の石室を構築したとき，石室幅の問題から袖石を省略したのではないかと私考される。横口前面の側壁が玄室部の側壁より内側から構築されず，一見両者が連続していることも石室幅の狭小さに求められよう。

稲童古墳群の所在する周防灘沿岸の旧京都郡には御所山古墳[註11]や番塚古墳[註12]などの古式横穴式石室を内部主体とする古墳が所在しているが，これらは肥前，特に唐津湾沿岸との関係が指摘されており[註13]，上述の釜塚古墳や大塚山古墳との関係もそれを裏付けるものといえる。いずれも海を意識した位置に築造されていることでも共通しており，玄界灘での海上交通を通じての直接，間接の交渉が想定されよう。

このように大塚山古墳石室は基本的には玄界灘沿岸に分布する竪穴系横口式石室の変遷の中に位置づけられる。変則的ともいえる横口部の構造はいまだ定型化する以前のものとみなすことができ，割石小口積みの壁体構成と合わせて本墳の築造年代が比較的古く遡るものであることを示している。しかしながら既述の小型化という点や隅角の処理技法などから5世紀中葉には遡りえず，石室の示す本墳の築造年代は5世紀後半とみることができよう。

出土遺物

既述したように須恵器と鉄器片の2点のみであり，石室内より遺物は検出されていない。須恵器（小型甕）は安政2年に採集されたものであるが，注目されるのはその出土位置で白華和尚の文書によると石室直上の大石[註14]の上に置かれていたらしい。これは石山勲氏[註15]が纒められた北部九州に於ける古式須恵器の古墳でのあり方と共通しており，竪穴式石室や箱式石棺などの「前代の葬制の内にその祖型が求められ」ると見てよいだろう。

形態的には頸部は短く細く，また体部は最大径を上部⅓にとり肩が張るなど古い要素を残しているが，各端部はやや鋭さが失われている。陶邑窯跡群の製品の直接の類例を求めることはできず，地方窯製品である可能性もあろう。甕は陶邑製品に比して地方窯製品のほうがより古い要素を残すことが指摘されている[註16]が，陶邑編年Ⅰ型式第3～4段階に併行する時期の製品とみてよいと考えられ，5世紀後半に比定される。

もう一点の今回採集した鉄器は小片ではあるが，蕨手刀子の破片であると思われる。蕨手刀子は全国的に分布するが，特に北，中部九州に濃密に分布しており，また対馬[註17]，韓国[註18]にもみられる。九州では下限をほぼ5世紀末葉に置くことができ，本墳の石室や須恵器の示す年代と矛盾しないといえる。

おわりに

以上のように石室構造，出土遺物から大塚山古墳の築造時期は5世紀後半とみることができる。該期は北部九州の古墳文化の一画期に当たり，前方後円墳の増加，横穴式石室を内部主体とする古墳の増加と分布の拡大，初期群集墳の形成などの現象がみられる。古墳時代前半期には顕著な古墳があまりなく前代に比べ相対的に地位が低下したとみられる壱岐も当然このような動きと無縁でなく，大塚山古墳の築造もその一環とみるべきであろう。

最後に本墳の壱岐の古墳に占める位置に触れ，まとめとしたい。

壱岐の古墳は数の多さは古くから知られており，現在でも200余りが確認されているが，個別的調査が遅れている[註19]ためその実態については不明な点が多く，特に4，5世紀代の様相についてはほとんどわかっていないといっても過言ではない。小田富士雄氏はその候補として箱式石棺，竪穴式石室を内部主体とする古墳を9例挙げられている[註20]が，それらの多くは時期を特定できる出土遺物を欠き年代的位置付けが困難な状況である。こうした中で大塚山古墳は5世紀後半という年代が与えられる点で貴重であり，またその内部主体が横穴式石室である点は従来不明であった横穴式石室導入の時期，或いは最も古い横穴式石室墳はどれかという問題の解明にも寄与できると思われる。

従来，壱岐最古の横穴式石室墳の候補として挙げられてきた[註21]ものに勝本町立石仲触若宮（わかみや）古墳，芦辺町国分本村触兵瀬（ひょうぜ）4号墳（百田頭（ひやくだがしら）5号墳[註22]），同町湯岳本村触覩上山古墳があったが，このうち短甲を出土した若宮古墳は横穴式石室をもつ確証はなく，また玄室は長方形プラン（2.9

×2.0m）を示すも所謂肥後型石室に類似した穹隆形に近い石室構造をとる百田頭5号墳は使用石材の大きさや粗雑さなどから5世紀代に比定するのは躊躇される。覩上山古墳は大塚山古墳の北西約1.4kmに所在する前方後円墳で，大塚山古墳と同じく「深江田原」を見降ろす丘陵に立地する。前方部とくびれ部の間に開口する横穴式石室を内部主体とするとみられるが，大半は埋没しているため詳細は不明である。石室に使用する石材の大きさから大塚山古墳に後続するものとみることができ，以上のことから大塚山古墳は現在のところ壱岐では最古の横穴式石室を内部主体とする古墳であると考えられる。

一方，大塚山古墳に先行する古墳としては小田氏が挙げられた9例のうち大塚山古墳に近接して所在する俵山古墳を挙げることができる。俵山古墳は大塚山古墳の所在する丘陵の東隣りの丘陵に立地し，昭和27年に東亜考古学会により調査されている。[註23] 墳形，規模は不明であるが，割石小口積みで構築された竪穴式石室を内部主体とする。石室内法は長さ1.85m，幅0.85m，高さ0.75mを測り，天井石は2枚で壁面にはベンガラが塗られている。遺物は未発見で時期比定は困難であるが，石室構造から大塚山古墳に先行することは間違いない。しかしながら両墳の時間的隔たりはあまり大きくないと思われる。

以上挙げた覩上山，大塚山，俵山古墳が所在する「深江田原」北側の丘陵地帯は古墳の分布上「中東部希薄地帯」[註24]と言われるように古墳の数は少ないが，これら壱岐では比較的古く位置づけられる古墳が所在しており，5世紀後半から6世紀初頭を中心とした時期にはかなりの勢力をもった豪族の存在が考えられる。しかしながら6世紀後半以降には島中央部の布気，国分地区を中心に多数の巨石墳が築造されており，該地は壱岐島直の氏寺を嶋分寺としたとされる嶋分寺（国分寺）跡の存在と合わせて壱岐直氏の本拠地であったと推測されているのに対し，この中東部地区には顕著な巨石墳は皆無に近い。このことは壱岐島内での豪族の勢力変化を現しているとみることができるかもしれないが，律令時代の壱岐国府は異説はあるものの覩上山古墳の南，「深江田原」西端の輿触（こうふれ）の地にあったとする説が有力であり，[註25] このような点も考慮に入れて検討してゆく必要がある。今後，個々の古墳の内容を明らかにした上での地域性の把握を重視し，また古墳以外の生活址の発見，調査も推進されてゆくことが望まれる。』

（副島康司）

註1　九州地方の例数であり，本州に分布する竪穴系横口式石室には逆に袖石を有さない例が多いことは注目される。（柳沢一男「竪穴系横口式石室再考」『森貞次郎博士古稀記念古文化論集』　1982）

2　福岡県山門郡瀬高町名木野竪穴系横口式石室墳（井上裕之ほか『名木野古墳群』　瀬高町教育委員会　1977）

佐賀県小城郡小城町一本松1号墳（木下巧『一本松古墳群調査概報—第2次発掘調査—』　小城町教育委員会　1971）など。

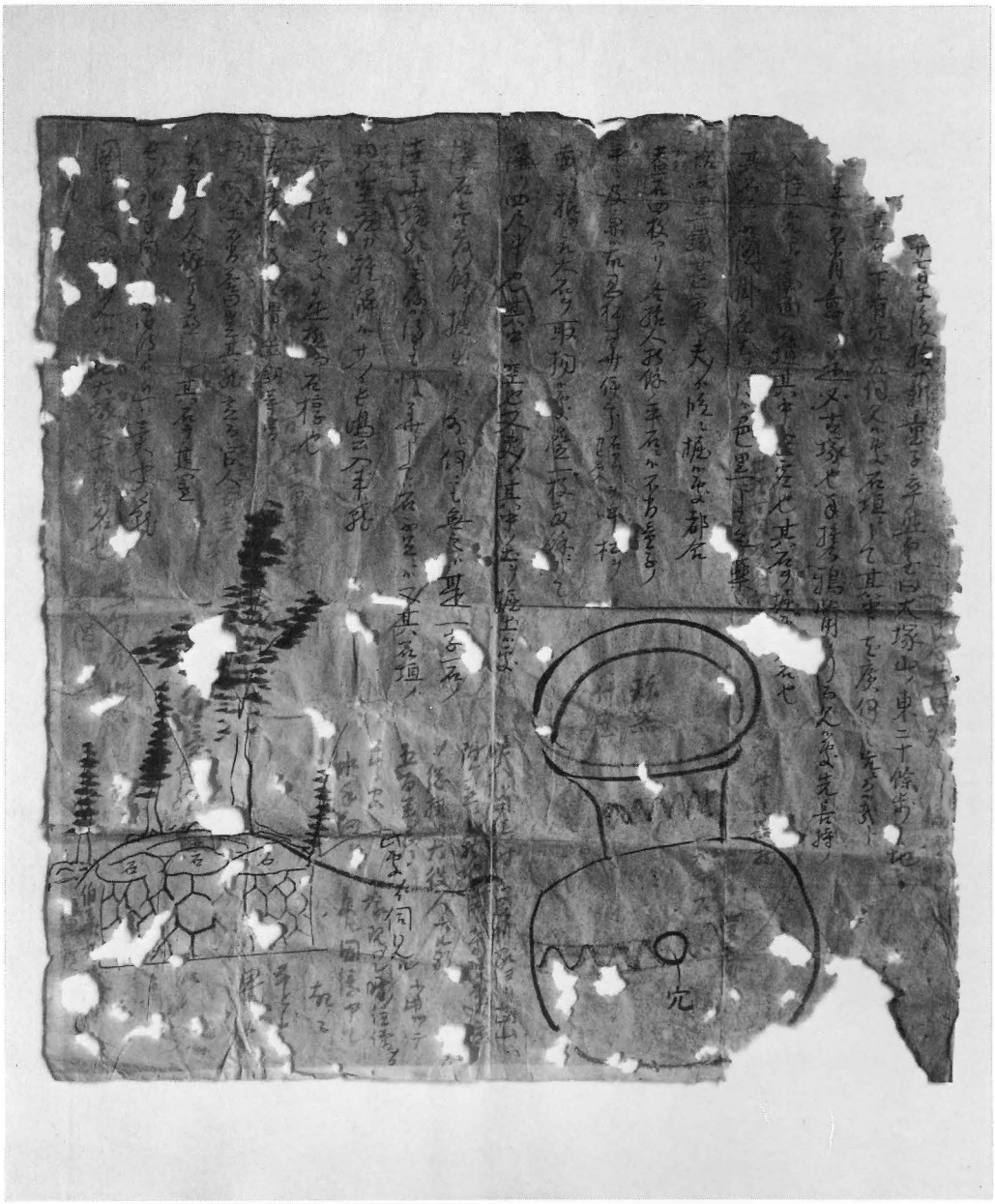
3　唐津市迫頭4号，8号，10号，14号墳，大長崎山古墳，小長崎山1号墳，神集島学校東2号墳（唐津湾周辺遺跡調査委員会編『末盧国』　六興出版　1982）

4　岡崎敬ほか『老司古墳』　老司古墳調査委員会　1969）

5　酒井仁夫『久戸古墳群』　宗像町教育委員会　1979
6　井上裕之ほか　前掲
7　山中英彦ほか『稲童古墳群第1次調査抄報』　蔵内古文化研究所　1964
8　柳沢一男　前掲
9　石山勲『釜塚』　前原町教育委員会　1981
10　山中英彦ほか『稲童古墳群第2次調査抄報』　蔵内古文化研究所　1965
11　石山勲ほか『史跡御所山古墳保存管理計画策定報告書』　苅田町教育委員会　1976
12　小田富士雄「九州」『日本の考古学』Ⅳ　河出書房新社　1966
13　石山勲ほか　註11
14　石室見取り図に描かれた3枚の天井石の上にのる大石を指すと思われる。
15　石山勲「古墳における 古式須恵器の あり方について」『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告書』X　福岡県教育委員会　1977
16　田辺昭三『須恵器大成』　角川書店　1982
17　長崎県上県郡豊玉町ハロウ遺跡 第2号箱式石棺墓，同郡峰町椎ノ浦古墳（九州大学考古学研究室『対馬』　長崎県教育委員会　1974）
18　慶尚北道大邱市達西面（内唐洞）55号墳（野守健・小泉顕夫「慶尚北道達城郡達西面古墳調査報告」『大正十二年度古蹟調査報告』第一冊　1931）
19　そうした中で松永泰彦氏の論文はこの点を補うものとして高く評価されよう。
　松永泰彦「壱岐島北部における古墳の現状」『壱岐』15　壱岐史蹟顕彰会　1981
20　小田富士雄「対馬・壱岐の古墳文化」『九州考古学研究　古墳時代篇』　学生社　1979
21　註20，福尾正彦「壱岐の古墳」『郷ノ浦町の古墳』　壱岐郷土館　1981
22　福尾正彦，前掲論文には兵瀬4号墳となっているが，百田頭5号墳が正しい。なお松永泰彦，前掲論文に略図がある。
23　昭和27年7月30日付，東亜考古学会調査日誌による。本墳はこの調査後破壊され，現在は見ることができない。
24　松永泰彦，前掲
25　日野尚志「壱岐嶋の国府・郡家について」『史学研究』130　1976
　高橋誠一「壱岐国」『古代日本の交通路』Ⅳ　大明堂　1979

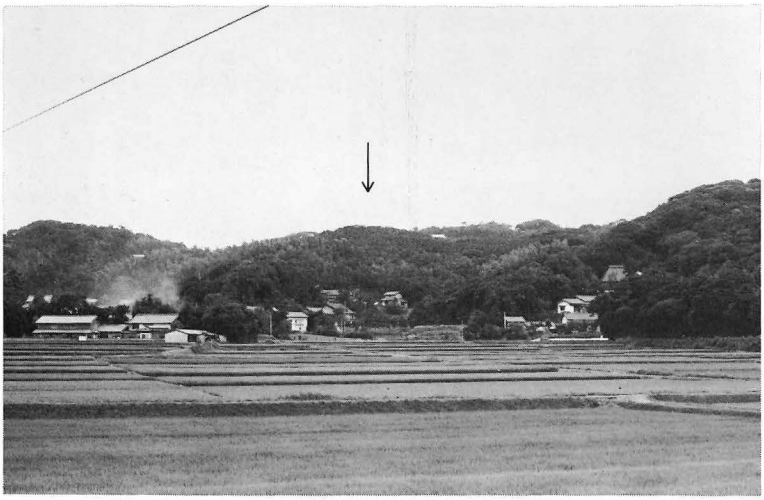
『本古墳の石室実測調査に際し，大蔵元廣，堀川誠太郎，松永泰彦，永元恵治の諸氏に多大のご協力を賜った。末尾ながら記して謝意を表したい。』

PLATES



白華和尚の古文書

PL.2



大塚山古墳
遠景（南側より）

遠景（北側より）

石室前方の深江田原

大塚山古墳遠景・石室前方の深江田原

石室

石室

石室全景

PL.4

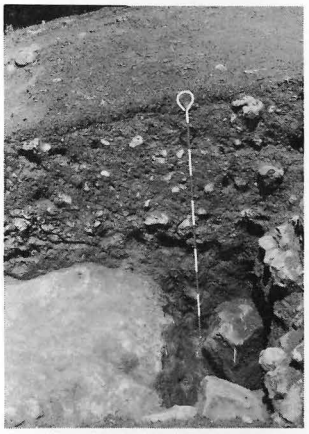
石室近景

石室近景

側壁

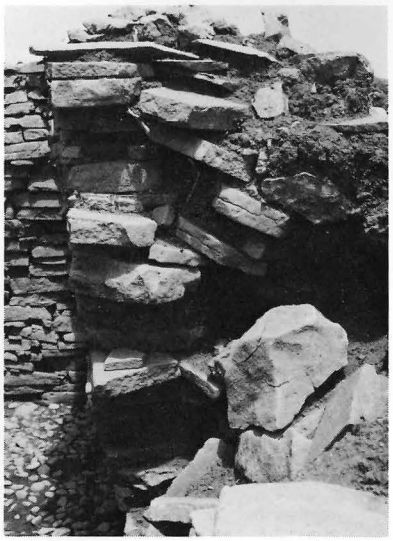
奥壁

側壁（横口部）



Cトレンチ地山掘込み状況

側壁（横口部）



石築構築状況

石築構築状況

PL.6

Dトレンチ石室裏込め状況

B・Dトレンチ石室裏込め状況

石室裏込め状況

Aトレンチ　墳丘土層断面

Bトレンチ
石室裏込め
状況

Bトレンチ　墳丘土層断面

Cトレンチ
石室裏込め
状況

Cトレンチ　墳丘土層断面

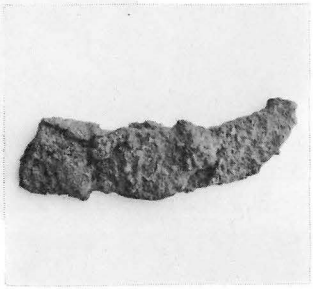
Dトレンチ
石室裏込め
状況

Dトレンチ　墳丘土層断面

A～Dトレンチの調査

PL.8

出土遺物（甕）



（蕨手刀子）

調査参加者

出土遺物・調査参加

芦辺町文化財調査報告書　第２集

大　塚　山　古　墳

昭和62年３月

発行　長崎県芦辺町教育委員会
〒811-53 壱岐郡芦辺町芦辺浦滝の上524

印刷　株式会社　隆　文　社
佐世保市瀬戸越 3-4-7